

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPOINT
2019.9. VOL.40

contents

極 研究&教育
Current topics in research and education

人 時の人
People in the news

技 最新医療の紹介
Latest developments on the medical front

和 お知らせ
Information

いなべ市地域医療連携推進学寄附講座の 設置に関する協定を締結

令和元年6月18日(火)、いなべ市及び三重県厚生農業協同組合連合会といなべ市地域医療連携推進学寄附講座の設置に関する協定を締結しました。

協定締結式では、いなべ市から日沖 靖 市長、三重県厚生農業協同組合連合会から齋藤 義則 理事長、竹山 廣光 三重北医療センター長、相田 直隆 いなべ総合病院長、名古屋市立大学から郡 健二郎 理事長、丹羽 吉彦 副理事長、小椋 祐一郎 理事(病院)・附属病院長、道川 誠 医学研究科長が参加し、それぞれの代表者が協定書に署名しました。

また、郡理事長から挨拶があり、「いなべ市をはじめとした地域の方々にながやま市立大学を知ってもらいたい機会であり、大学の発展につなげたい」と述べられました。また、日沖市長、齋藤理事長からも挨拶があり、寄附講座の設置により、三者が連携して地域医療のさらなる発展に寄与していくことが確認されました。



締結式にて。下段左から竹山三重北医療センター長、郡理事長、日沖いなべ市長、齋藤JA三重厚生連理事長、相田いなべ総合病院長、上段左から小椋病院長、道川医学研究科長、丹羽副理事長

この寄附講座では、いなべ市を中心として桑員区域及び北勢医療圏における地域医療に関する研究・教育を行うとともに、その研究成果の普及と人材の養成を行い、最適な地域医療体制の構築に寄与することを目的としています。

これらの目的を達成するため、いなべ市における地域医療ネットワーク構築に関する研究、地域包括ケアシステム構築に関する研究、患者ニーズを踏まえた病院機能に関する調査・研究及び救急医、総合医など地域医療を担う医師等の養成及び研修プログラムの研究などの事業を積極的に行っていきます。



いなべ総合病院

また、本寄附講座では、その活動拠点を名市大病院及び三重北医療センターいなべ総合病院に置くことにしています。いなべ総合病院は、いなべ市との関係が深く、地域住民からも強い支持を受けていることから、地域包括ケアシステムの構築等について、行政からの支援・協力のもと、充実した研究・教育が可能となります。

これまで本学では、蒲郡市との連携等により、地域医療に関する研究・教育を推進してまいりましたが、この度、新たにいなべ市地域医療連携推進学寄附講座を設置することにより、地域医療の発展へのさらなる貢献を進めてまいります。

文責:教育研究課学術研究推進係

“瑞医の由来”

「瑞医(ずいい)」という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPOINT」は、「Medical」と「Port(港・空港)」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出発し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

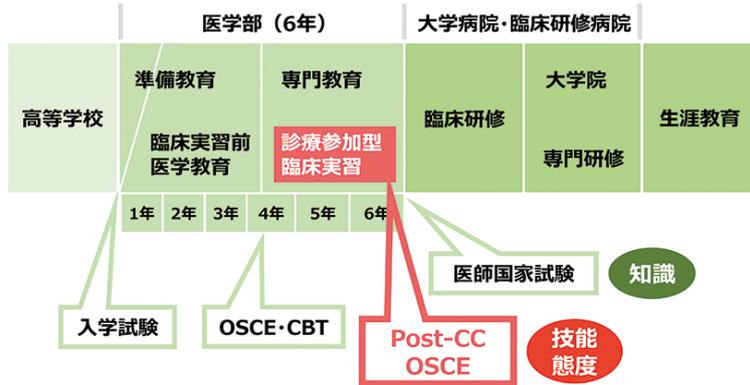
教 育

共用試験Post-CC OSCEを実施しました！

7月27日(土)に附属病院外来棟・西棟で、共用試験Post-CC OSCEを実施しました。

Post-CC OSCE(Post-Clinical Clerkship Objective Structured Clinical Examination、ポストシーシーオスキー)とは、医学部6年生が臨床実習を終えて、研修医として必要な技能・態度を身に付けているかを測る「臨床実習終了後の実技試験」です。

現在、全国の医学部では、医師の育成過程において大きな改革が行われており、Post-CC OSCEの導入もその一つです。これまでは、臨床実習を開始する前に、病院で患者さんを前に医行為を行うための知識・技能・態度を身に付けているかを測る共用試験OSCE・CBTを行ってきました。また、卒業時には医師国家試験で医師に必要な「知識」の修得を測られますが、卒業時の「技能・態度」を測る全国共通の試験はありませんでした。そこで、導入されたのが、Post-CC OSCEです。本学医学部では、今年ではじめて“トライアル”試験(実際の成績判定には用いない)の形で実施し、来年度からは卒業試験として正式導入します。



医師の育成過程におけるPost-CC OSCEの位置付け

Post-CC OSCEの試験内容は、「頭痛・腹痛などを訴える模擬患者に医療面接し、鑑別診断を考え、的を絞った身体診察を行い、考えられる病態や、鑑別診断のための検査計画、治療方針などを指導医に報告する」というもので、研修医になった際の日常診療の一場面を切り取ったものとなっています。



試験内容

当日は、受験生72名が日頃の実習で培った力を発揮してくれました。また、教員90名が採点官・医療面接の模擬患者として、下級生85名が身体診察模擬患者役として参加しました。運営担当の教職員をあわせて約300名を動員する大規模な試験となりましたが、大きなトラブルなく終わることができました。終了後には、参加教員全員で試験を振り返り、反省点・改善方法を話し合いました。しっかりとした技能と態度を身に付けた卒業生を社会に送り出すため、来年度の正式実施に向けて準備を進めていきたいと思います。



終了後の反省会の様子

医学教育分野別評価を受審します！

医学部では、10月8日(火)～11日(金)の日程で、医学教育分野別評価の現地調査を受審します。医学教育分野別評価とは、日本医学教育評価機構(JACME)により国際基準に合致した医学教育を実施しているかの審査を受けるもので、9領域72項目の審査項目からなります。

2年前から準備を開始し、本年5月には、教授陣を中心に、本学医学教育の現状と今後について執筆を続けてきた「自己点検評価報告書」を完成させ、書面審査を受けました。10月の現地調査では、7名の外部調査員により実際の講義・実習の見学、教員・学生・研修医の面談等を行います。そして、3月頃には認定結果が出る予定です。

医学教育分野別評価の受審により、本学医学教育の「良い点」と「改善すべき点」を客観的に認識し、受審後も継続的な改善を続けていくことによって、より良い教育の実践につなげていく必要があります。

医学教育分野別評価 現地調査スケジュール

	8日(火)	9日(水)	10日(木)	11日(金)
午前	開会式	臨床実習見学	領域7検討	評価員会議
	領域1検討	領域4検討	基礎医学実習見学	閉会式
	施設見学	領域5検討	領域8・9検討	
領域2検討	領域6検討	教員面談		
午後	領域3検討	研修医面談	評価員会議	評価員会議
	評価員会議	研究室見学		
		学生面談		



教授全員で執筆した自己点検評価報告書

名古屋市立大学・名古屋市社会医学系専門医研修プログラムの紹介

社会医学とは、国や地域および職場等における集団や制度・仕組み等に働きかけ、人々の健康増進、病気の予防や回復、医療制度の改善等、健康に関する安心と安全を追及する学問です。この分野では、厚生労働省等の医系技官や保健所等の医師、企業の産業医および大学の研究者など、様々な立場の医師がそれぞれの視点で役割を果たしており、これらの医師の専門性を高めるために2017年4月より社会医学系専門医制度が発足しました。設立の目的は「個人へのアプローチにとどまらず、多様な集団、環境、社会システムへのアプローチを中心として、人々の健康の保持・増進、傷病の予防、リスク管理や社会制度運用に関してリーダーシップを発揮する専門医を養成すること」とされ、制度運営は社会医学系専門医協会（社会医学分野の8学会および6団体より構成）が行っています。初期臨床研修を終えた後に専攻医として3年間の研修を受けたのち、試験に合格することにより専門医資格を取得することができます。社会医学を現場での経験を通じて学び、社会へ貢献する人材に成長できる制度です。

本学の専門医研修プログラムは2017年に認定され、今年度、一期生となる3名の専攻医の研修がスタートしました。本学のプログラムは名古屋市との合同プログラムであるという特徴を有し、研修の主体となる基幹施設として、名古屋市立大学大学院医学研究科予防・社会医学専攻と名古屋市保健所を登録しています。専攻医の研修に関する事項は名古屋市立大学と名古屋市健康福祉局の間で覚書を交わし、連携して取り組んでいくことを確認しています。これにより、本学医学研究科所属の大学院生または研究生と、名古屋市公衆衛生医師が専攻医として研修を積むことが出来ます。また、協力施設として本学大学病院や名古屋市衛生研究所および精神保健福祉センター、県内の企業等を登録しており、産業保健・環境保健、行政・地域医療、医療情報・医療安全および医療倫理等の各分野について実務を通じた研修を受けられます。専攻医のバックグラウンドや所属により研修内容は異なりますが、専門医試験受験資格を得るまでに一定水準の知識・技能の習得が可能です。

興味のある方は環境労働衛生学まで、お問い合わせください。

文責:環境労働衛生学分野 助教 佐藤 博貴

研修計画例

専門医研修開始	大学 院生・ 研究 生	大学 院生・ 研究 生	公衆 衛生 専攻 生
<1年目> 業務研修項目に関する基本的知識とスキルを習得	研究テーマ設定 講義・実習 実験・疫学研究	研究テーマ設定 講義・実習 実験・疫学研究	行政実務・基礎的技術の学習・習得、課題の抽出
<2年目> 1年目で未習得の項目について重点的に研修	講義・実習 実験・疫学研究 学会発表、論文執筆開始	講義・実習 実験・疫学研究 学会発表、論文執筆開始	行政実務の専門的技術の学習・実行、課題の抽出
<3年目> 特定がC研修の項目について重点的に研修	実験・疫学研究 学会発表 論文執筆、投稿	実験・疫学研究 学会発表 論文執筆、投稿	行政実務等の企画・立案、課題解決の方途の学習・実行、課題の発表
専門医研修終了	学位申請・取得 受検・資格取得 サブスペシャリティ研修	学位申請・取得 社会医学の専門家として活動※	学位申請・取得 社会医学の視点を持つ種 業家として活動

※産業医の場合、引き続き名古屋市立大学でサブスペシャリティ領域である日本産業衛生学会専門医制度の研修が可能（日本産業衛生学会の専攻医試験は免除）

研 究

令和元年度科研費「若手研究」の採択率は過去最高!

毎年4月1日は、前年度秋に応募した文科科研費の交付内定があります。応募された先生方は緊張してこの日をお迎えになると思いますが、私(医学部科研費担当者)はとても楽しみな日です。毎年、採択率の速報を作成するためExcelに数字を入力ながら一喜一憂し、ひとり反省会をします。しかし、今年度は、関数を入れ間違えたのか?と再確認しました。若手研究応募者137件、そのうち採択は69件、なんと! 50.4%の採択率でした。例年概ね30~33%ですので、大変驚きました。基盤研究等を合わせると全体では50件増、1億円増です。(若手採択者の紹介はP6「若手期待の星」をご覧ください)

医学研究科では、平成23年度から科研費応募に向けたセミナーを開始しました。

当初、研究棟2階の臨床セミナー室を予定していましたが、参加希望者多数のため会場を変更したほど大盛況でした。

平成28年度からは学内ピアレビューが始まりました。郡学長のお声掛けで、(急に)始まり事務側も初めてのことで右往左往しました。翌年からは、研究科内でレビューを選出し、分野を超えて応募書類のピアレビューを実施するようになりました。

セミナーやピアレビューの他にも、科研費改革による応募要件や様式の変化に伴い、意見交換の場を設けたり、勉強会を実施しています。バナナのお土産付きの会もありました。→→→→

こうした外部資金獲得に向けた様々な活動が分野内、研究科内、大学内全体の士気を高め、応募数の拡大や高い採択率に結びついているのだと思います。

現在は令和2年度科研費応募期間中です。応募対象者は、教授・准教授・講師・助教・病院助教・臨床研究医/歯科医・研究員です。応募しないと採択自体ありません!是非是非、応募してください。全力でサポートします!

文責:教育研究課 学術研究推進係



科研費セミナー初回のポスターはこれ。細胞生化学の前教授・中西真先生(現東京大学)作です。このイラストは現在も科研費セミナーの目印になっています。

新任教授紹介

認知症科学分野— 齊藤 貴志 教授

2019年7月1日付で名古屋市立大学・大学院医学研究科 認知症科学分野の教授を拝命し、初めて住む名古屋の地へやってまいりました。

私は、福岡生まれの熊本育ちで1996年に熊本大学薬学部を卒業し、高濱和夫先生、甲斐広文先生のもと修士課程まで熊本で過ごしました。その後、大阪大学大学院医学系研究科・谷口直之先生のもとで博士課程を過ごし2002年に学位を取得致しました。それまでは、遺伝性骨疾患やガンの転移機構の解明に資する基礎研究を行って参りました。大阪在住時に祖母が認知症に罹患したことをきっかけに、学位取得後の研究対象を認知症へと移しました。学位取得直後から、埼玉県和光市の理化学研究所・脳科学総合研究センター（現・脳神経科学研究センター）にて博士研究員として西道隆臣チームリーダーのもと認知症・アルツハイマー病研究に携わって参りました。2011年から西道チームの副チームリーダーとして研究だけでなく、チーム運営からセンター運営にも携わる機会を得たことを通して独立した研究を行いたいと強く思って参りました。理研在籍時の成果が評価され、日本生化学会 奨励賞、日本認知症学会 学会賞、文部科学大臣表彰 若手科学者賞などを受賞することができました。個人的には、2014年および2019年に報告した「次世代型アルツハイマー病モデルマウスの開発」が機となって、これまでに350件以上の共同研究を締結し、世界中に研究ネットワークを構築し、研究者同士の繋がりをもてたことが大きな成果だと感じています。

名古屋市立大学でも、世界中のアルツハイマー病研究の“ハブ”として存在感を発揮し、認知症の克服のために尽力したいと考えております。そして、名古屋から世界へ向けた研究成果の発信と研究者の育成に力を注いで参りたいと考えております。



齊藤 貴志 教授

新任教授紹介

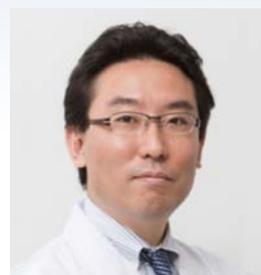
腎臓内科学分野— 濱野 高行 教授

2019年8月1日から新設された腎臓内科学分野の教授を拝命しました。区切りの良い令和元年に腎臓内科の初代教授を務めさせて頂けるのは、非常に光栄です。生まれも育ちも大阪で、外来では「先生、関西ですか?」と患者さんに言われておりますが、徐々に名古屋に溶け込んでいきたいと思っております。

私は平成10年に大阪大学医学部を卒業し、同医学部附属病院ではICUなどで研修を積み、その後大阪府立病院（現大阪急性期・総合医療センター）と関西ろうさい病院で、内科研修に加え救急の研修も終えました。その後に大阪大学大学院で学位を取得した後に同大学の老年・腎臓内科の助教を務めました。平成20年からは、ペンシルバニア大学臨床疫学・生物統計センターのフェローを約3年半務め、米国で最新の生物統計学を学びました。帰国後は大阪大学大学院の寄附講座の准教授として、同講座を主宰しました。

私の研究領域は、腎不全の2大合併症である慢性腎臓病に伴うミネラル骨代謝異常(CKD-MBD)と腎性貧血、さらには心腎連関です。研究の特色は、基礎研究と臨床研究を融合にあり、基礎研究の内容を臨床研究に昇華することを得意としております。CKD-MBDは、血管連関とも言うべき考えかたで、骨の脆弱性(二次性骨粗鬆症)がひどいほど血管石灰化(血管が骨になる!)が進行するというシンドロームです。国際的なKDIGOのCKD-MBDガイドラインの改訂にも日本代表として関わってきました。

本講座は臨床を主座にします。具体的には、他科に役立ってこそその診療科であることを肝に銘じ、急性腎不全のみならず電解質異常や輸液の管理で貢献できれば、と考えております。その上で、臨床にすぐに還元できる臨床研究を中心にしたと考えております。また生物統計を得意としており、他科との共同研究をも視野に、診療科横断的研究も考えております。



濱野 高行 教授

新任教授紹介

地域医療教育研究センター— 野尻 俊輔 教授

2019年7月1日付で名古屋市立大学大学院医学研究科 地域医療教育研究センター教授を拝命いたしました。地域医療の充実と教育、大学との連携強化を目標に三重北医療センターいなべ総合病院と大学両方での勤務を始めております。

平成2年に名古屋市立大学医学部を卒業後、平成3年より6年半名古屋市立城西病院で内科医として研鑽を積みました。平成10年4月からは米国フィラデルフィアのThomas Jefferson Universityに留学させていただき肝臓のシグナル伝達におけるCa反応の研究に従事し、実験内容が雑誌Hepatologyの表紙を飾らせていただく幸運にも恵まれました。帰国後大学院を経て以後一貫して肝癌、肝硬変と栄養に関する研究と臨床に携わり肝発癌抑制に血清アルブミンが重要であることを臨床、動物実験で証明し微力ながら肝癌治療に貢献できたと思っております。

私のもう一つ大きな特徴として医師になった時より中国医学にも興味を持ち独自に勉強を重ね、8年前からは毎年天津中医药大学で研修を積んでまいりました。その縁あって2017年には本学と大学間協定を締結しております。ここ5年ほどは治療に難渋する肝硬変、肝癌の患者様に漢方薬を併用し成果をあげていますが今後高齢化が一層進む時代になり漢方を取り入れた治療は分野を問わずその需要が高まってきます。地域機関病院であるいなべ総合病院で漢方外来を開設し、大学では西洋医学の不得手な分野(例:複数科にまたがる多彩な症状等)や抗癌剤使用時の副作用軽減を目的としたエキス剤のみならず生薬を使用する漢方薬治療を特徴とした外来を目指しております(現在毎週金曜日)。どうぞこれからも何卒ご指導ご鞭撻のほど、また漢方外来への患者紹介をお願いいたします。



野尻 俊輔 教授

新任教授紹介

臨床腫瘍部— 小松 弘和 教授

この度、2019年7月1日付けで、臨床腫瘍部(診療担当)教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

1988年名古屋市立大学を卒業し、当時の第二内科入局以降、静岡済生会総合病院、愛知県がんセンター中央病院等で血液・腫瘍内科学の臨床経験を積みました。1998年から3年間は米国コロンビア大学医学部に血液腫瘍におけるがん抑制遺伝子の研究に従事し、帰国後は当院化学療法部(中央部門)を担当する機会をいただきました。

2019年5月、当院のがん治療をあらためて強化する目的のため、がん診療・包括ケアセンターが開設されるのを機に、化学療法部の役割も、抗がん剤の管理に留まらず、ゲノム医療を含めた希少がん・難治がんの診療、カンサーボードといった集学的治療の推進、臨床腫瘍医など人材育成、がん教育等の社会的貢献といった課題に取り組む必要性が高まり、化学療法部は臨床腫瘍部として改組されることになりました。一つ一つ、これらの課題に取り組んでいく所存であります。

私の医師としての役割は、患者さんを「護る」ことでもあります。がんという疾病から護るのみならず、患者さんに降りかかるすべての障壁から護る、という意味として患者さんと向き合い続けたいと考えています。名古屋生まれの名古屋育ち、そして名市大に育てられてきた私の「名古屋(市大)」への愛着は人一倍です。がんで困らない、がんを克服できるという大きな目標を抱き続けながら、名古屋市民、社会の健康に寄与するとともに、皆様のがん医療のお力添えになればと考えております。

最後に、私は家族、兄弟、同志、諸先輩の方々からいただいた助言を繰り返し思い考え、自身の糧にさせていただきました。これからも、どうぞ貴重なご進言をいただけましたら心から有難く思います。何卒よろしく願い申し上げます。



小松 弘和 教授

03 時の人 People in the news

新任教員紹介

医療人育成学 — 柿崎 真沙子 講師

2018年10月1日付で名古屋市立大学大学院医学研究科医療人育成学分野の寄附講座講師を拝命しました。

私は東京下町・葛飾区生まれの葛飾区育ちで、2004年に明治大学農学部農学科を卒業し、東北大学大学院医学系研究科障害科学専攻で修士と博士を取得しました。東北大学では、書類上所属する分野は行動医学分野でしたが、学内留学という形で公衆衛生学分野にも籍を置き、パーソナリティや睡眠時間といった精神・心理系の指標と、生活習慣病に関する疫学研究を行いました。大学院修了後は、技術移転の会社で1年間技術営業をしたのち、2010年から東北大学の公衆衛生学分野に戻り、東日本大震災を挟んで助教として4年ほど勤務しました。東北大時代は専門とする精神・心理の疫学以外にも、コホート研究を実施するにあたり非常に重要になる追跡情報や疾病罹患情報の登録業務、研究に関わる各種データベースの整理、東日本大震災の被災地における新規調査の立ち上げや運営を行いました。2014年からは藤田保健衛生大学（現・藤田医科大学）の公衆衛生学分野に講師として赴任し、現在に至ります。

名古屋市立大学では、医療人育成推進センターのIR部門で部門員として、医学部の教学IR（Institutional Research）の担当として、学生の成績分析や、卒業時・入学時のアンケート調査、教育プログラムの評価やデータベースの作成業務に関わっています。これまでの経験を生かし、名古屋市立大学の医学部の教育がよりよいものになるよう、貢献できればと思っています。



柿崎 真沙子 講師

若手期待の星★

科研費 若手研究 採択者の皆さん

浅野 倫子	小川 紫野	鈴木 識裕	中野 優	松本 洋介
伊藤 嘉規	加藤 賢治	関谷 真二	中村 令子	的場 拓磨
井野 敬子	加藤 裕史	仙頭 佳起	西川 さや香	三浦 敏靖
井上 奈緒美	川口 洋平	高瀬 範明	西原 春奈	水野 将行
岩田 英敏	木下 史緒理	高野 学	橋本 眞吾	南方 寿哉
打田 佑人	黒柳 元	武田 恵利	長谷川 貴昭	村井 太郎
海野 奈央子	桑山 創一郎	田村 哲也	早川 和男	モハンマド アブドラ
海野 怜	後藤 志信	爲近 真也	久田 知可	守時 良演
大久保 友貴	小林 真	戸谷 治仁	廣川 高久	山田 剛平
太田 賢吾	佐川 弘之	利重 裕子	福田 真未子	山田 敏之
太田 裕也	佐川 容子	永井 圭一	堀 いくみ	山田 瑠里子
大橋 圭	佐藤 博貴	仲井 希	堀 寧	吉田 雅人
大見 関	シャウキ ホッサム	中井 洋佑	前田 杏梨	吉本 信保
小笠原 治	白石 直	中須賀 公亮	益田 秀之	(五十音順・敬称略)

2019年7月に名古屋市立大学病院 肥満症治療センターが開設されました

2019年7月1日付けで肥満症治療センター(Center for Obesity Research and Therapeutics(CORT))が設立されました。同センターは、消化器外科、内分泌・糖尿病内科が中心となり、睡眠医療センター、精神科、臨床栄養管理室、看護部など院内の多数の部門が一致団結して肥満症診療に取り組むセンターで、国公立大学病院では第一号です。

肥満は、糖尿病や高血圧、脂質異常症、睡眠時無呼吸症候群をはじめ、不妊や腰痛、心筋梗塞、脳卒中などさまざまな病気の原因となります。肥満にこれら健康障害のいずれかを合併したものは肥満症と診断され、治療を要するれっきとした病気です。しかし、肥満症発症から、心臓病や脳卒中など命にかかわる病態や、壊疽による下肢切断、失明、腎不全に至るには10～20年以上を要することから、「今は痛くも痒くもない」肥満症の対策は医療現場においてすら遅れがちです。

最近の研究により、肥満症は単なる自制心の欠如ではなく、脳の食欲中枢や脂肪組織に明らかな分子異常をきたす疾病である、との理解が一般的となりました。従来、多くの肥満症患者さんは民間療法やマスメディアの情報に基づく我流の減量法に頼ってこられてきましたが、研究が進んだ今、先端的医療技術による肥満症治療の実践が望まれます。

そこで名古屋市立大学病院では、科学的根拠に基づいた最新の集学的肥満症診療を提供するため、肥満症治療センターを設立しました。実際には、第一にホルモンの病気などによる二次性肥満症の検査、第二に肥満合併症の有無の確認と病状把握、そして第三には、専門家集団による最先端の肥満症治療を行います。肥満症治療の基本が、食事療法と運動療法であることには変わりはありません。センターではこれに加え、生活習慣パタン是正のための認知行動療法や、約2週間の入院での低～超低エネルギー食治療、抗肥満薬治療、腹腔鏡下スリーブ状胃切除術などの肥満外科手術を、症例に即してコーディネート致します。

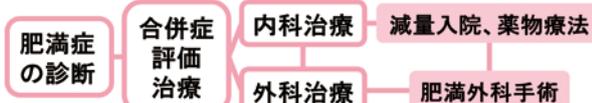
死に至る難病、肥満症の克服に向けてメンバー一丸となって取り組むことで、減量の達成と維持はもちろんのこと、糖尿病などの合併症の寛解や、健康寿命の延伸に貢献して参りたいと思います。ご支援とご協力をお願い申し上げます。

名古屋市立大学病院
肥満症治療センター
Center for Obesity Research and Therapeutics (CORT)
令和元年7月1日 設立



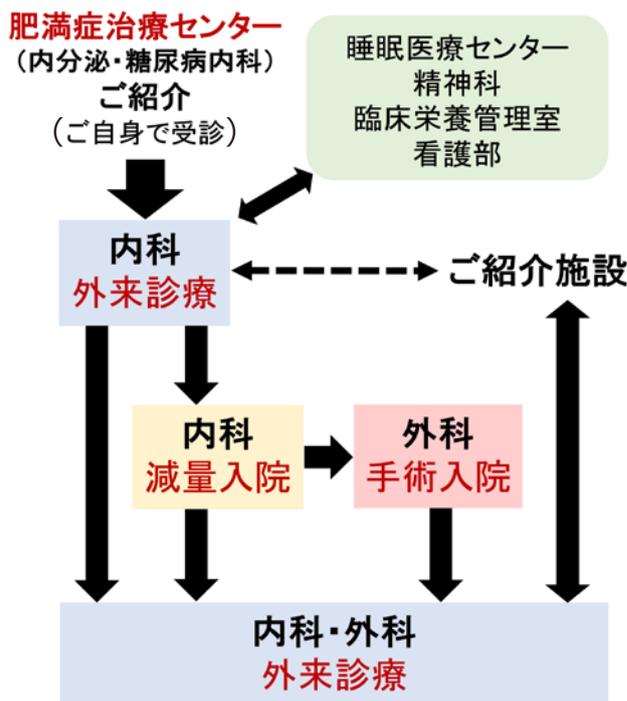
“肥満症”は病気です。

“肥満症”とは 肥満(≥BMI 25kg/m²)に糖尿病、脂質異常症、高血圧、痛風、心筋梗塞、脳梗塞、脂肪肝、月経異常・不妊、睡眠時無呼吸症候群、足・腰・膝の痛み、腎臓病などを併発した病気です。治療の対象であり、治療法もあります。



“かくれ肥満症”から“高度肥満症”まで、受診ご希望の方は
名市大病院 内分泌・糖尿病内科 初診外来を受診ください。

肥満症治療センターご受診後の流れ



04 最新医療の紹介

Latest developments on the medical front

名古屋市立大学病院 周術期ケアセンターの開設

名古屋市立大学病院でおこなわれている手術は毎年増え続けており、2018年度には9,633件となりました。複雑で困難な術式が多くを占めるようになったうえ、患者さんは高齢化し多くの併存症をお持ちです。そのうえ急性期病院として入院日数の短縮が求められており、リスクが増え・医療者の負担が増え・患者さんの不安も増えている状況でした。

そこで、「多職種チームにより、総合的に質の高い周術期ケアを提供する」ことを目的として、周術期ケアセンターを2019年4月に開設いたしました。各診療科や病棟スタッフとも連携して、多職種（手術室看護師、麻酔科、歯科口腔外科、リハビリテーション技術科、栄養管理係、薬剤部、臨床工学室、臨床検査技術科、術後回診チーム、患者サポートセンター、医事課、事務課など）で①術後早期回復 ②合併症低減 ③患者満足度向上などを目指します。

現在のところ人工膝関節置換術（整形外科）と食道手術（消化器・一般外科）に関わっており、次は頭頸部癌手術（耳鼻いんこう科）との連携が予定されています。職能を生かした効率的できめの細かい術前準備においては、患者さんから「安心して手術に臨めた」とお褒めいただき、整形外科の医師から「手間が10分の1になった」と感謝され、食道手術では術後肺炎を減らすための取り組みの効果がでています。深部静脈血栓症の発見と治療例が増えたことから、安全に手術がおこなわれる体制が強化されているのがおわかりいただけます。また術後には、薬剤師と看護師の術後回診チームで、痛みと吐気の回診を毎朝おこなっています。さらに手術のゴールは社会復帰であると位置付けて、多部門で積極的な対策をとっています。

今後は、対象とする術式や活動の範囲をさらに広げて、より多くの患者さんや医療者のお役に立てるよう努めてまいります。周術期に関わる職種のチカラを集結して、日本に、世界に誇れる周術期ケアを名古屋市立大学病院で提供できるようチーム医療を促進していく所存です。

文責：仙頭 佳起（副センター長）



Perioperative Care Center
周術期ケアセンター
Nagoya City University Hospital

ロゴ紹介

患者さんと医療者が、あるいは医療者同士があたたかく手を取り合うイメージ。4つの星は「多職種」や「術前・術中・術後・社会復帰」を表しています。



術前から関わった患者さんの経過がよいと、術後回診の雰囲気も和みます。



「名古屋市立大学と国立がん研究センターとの包括協定に関する協定書調印式について」

2019年7月23日午後3時より、国立がん研究センターにおいて本学と国立がん研究センターの包括連携協定の締結式が行われました。本協定は、がん研究、がん医療と患者ケアの一層の発展と充実に資するために、教育、研究、医療、社会貢献、情報交換や人事交流などの分野で相互連携を推進していくことを目的としています。国立がん研究センターの中釜齊理事長と本学の郡健二郎理事長との間で協定書への署名が取り交わされました。



郡理事長と中釜国立がん研究センター理事長

中釜理事長のご挨拶では、患者さんに還元できるゲノム医療の推進、がん医療と研究において日本がアジアおよび国際的なリーダーシップを取っていくことの重要性が語られ、本協定に基づく本学との協調に期待するお言葉をいただきました。郡理事長からは、本学で新たに開設したがん診療・包括ケアセンターを中心にがん研究、がん医療と患者ケアを充実させていく決意が語られ、本協定に対する大きな期待が述べられました。

その後、国立がん研究センターの武井貞治理事長特任補佐/人材育成管理事務部長と廣田正実統括事務（総務）部長、本学から私と青山賢二事務課長を交えて具体的な連携内容について懇談の時間がもたれました。約30分間の協定書調印式でしたが、あっという間に時間が過ぎてしまいました。今後、がん医療やがん研究に携わる皆様からの提案に基づいて具体的な連携事業を稼働させ、人事交流や情報交換が進み、がん患者さんや社会に還元できることを期待しております。

文責：飯田 真介（がん診療・包括ケアセンター長）

学生生活

ハルリム大学からの留学生を受け入れました

医学部では国際交流協定に基づく学生交流の一環として、協定校の韓国ハルリム大学より毎年留学生を受け入れています。今年は女子学生1名が7/1～7/26の4週間、本学の5年生と一緒に病院での臨床実習に参加しました。なお、本学からは3年時に研究室に所属して医学研究を行う「基礎自主研修」でハルリム大学に学生を派遣しています。

初日には、道川医学研究科長より激励の言葉をいただき、実習を開始しました。

実習する診療科については留学生に希望を取り、2週間ずつ消化器外科と産婦人科をまわりました。初めは慣れない環境や日本語を交えたコミュニケーションに緊張していた様子でしたが、数日後には本学学生と余暇に歓談する姿も見られ充実した日々を過ごしているようでした。また、意欲ある留学生とともに実習をすることは、本学の5年生にとっても良い刺激となったようです。このような実りある交流のために、留学生を受け入れてくださった診療科の先生方をはじめ、医局の皆様にはこの場をお借りして感謝申し上げます。



右から道川研究科長、イチヨンさん

西医体を開催しました

8月5日から19日にかけて関西医科大学主管で第71回西日本医科学生総合体育大会(西医体)が行われました。名古屋市立大学からは13のクラブが出場しました。ラグビーワールドカップを秋に、東京五輪を来夏に控え日本中がスポーツに盛り上がる中、例年より一層熱の入った試合が繰り広げられました。令和1回目の開催となった今大会、男子バレーボール部、卓球部男子団体、女子ゴルフ部が見事優勝を果たしました。西医体での3団体の優勝は名市大至近20年で最多の快挙です。その他にも男子ゴルフ部が準優勝、剣道部女子団体が3位と素晴らしい結果を残しました。陸上競技部、水泳部、ゴルフ部からも個人の入賞者が出ました。

来年度の西医体は鳥取大学主管で行われます。今回の結果を上回る良い結果が出せるよう各クラブさらに研鑽を積んでほしいと思います。

西医体出場にあたりご支援いただきました医学部同窓会の皆さま、大会運営に当たってくださった主管校の皆さまをはじめ西医体出場にご協力くださった多くの方々に厚く御礼申し上げます。



医学部4年生 山田 剛大

「6th Asian Society of Head & Neck Oncology」にて 学生が口頭発表を行いました!

昨年度の3月27日から30日にかけて韓国・ソウル市で開催された「6th Asian Society of Head & Neck Oncology」にて、「Rapid and simple multiplex RT-PCR assay for fusion genes specific to salivary gland tumors (multiplex RT-PCRによる唾液腺腫瘍の融合遺伝子検出系の確立)」という演題で口頭発表をさせて頂きました。

学会ではスライドを用いて英語で発表した後に会場で質疑応答を受けました。アジア各国から参加された先生方とのディスカッションを通して自分自身の研究に対する理解をより深めることができ、なにより第一線で研究されている先生方とこのように議論することは非常に刺激になりました。また海外の学会ということもあり英語での発表の仕方を学ぶことができました。今回の発表を通して自分自身の研究内容について分かりやすく世界に発信することの難しさを体感することができました。この経験を今後の研究発表などに活かし日々精進してまいります。

最後になりましたが、MD-PhDコースとしてご支援して下さいました大学関係者の皆様、そして熱心に指導して下さいました稲垣宏教授をはじめ臨床病態病理学の先生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



医学部5年生 山本 周平

学生生活

「第30回日本医学会総会2019中部」で 学生がプレゼンテーションを行いました！

4年に1回開催の医学の祭典である「第30回日本医学会総会2019中部」が名古屋国際会議場で開催され、4月28日、“医師としてのプロフェッショナルリズムをめざして”というテーマで学生企画が行われました。愛知県4大学医学部の学生たちがそれぞれ工夫を凝らした企画を持ち寄りしました。私たち名古屋市立大学は、社会に貢献できる医師になるために、医学生時代をどのように過ごすべきかを考えるシンポジウムを持ちました。とくに部活動、学園祭、アルバイトなどは将来、医師となるためにどのような影響を及ぼすのかを会場に参加した皆さんと一緒に考えました。三輪真子さんが部活動やアルバイトに関する名市大生の動向についてアンケート結果を報告した後、ラグビー部の東凌平くんが他学部学生との交流の素晴らしさを、バドミントン部の横井駿太くんが少人数ならではの責任感と協調性を、私が極みを目指すゴルフ部の厳しさと楽しさを、蝶ヶ岳ボランティア診療班の畑中景くんがリサーチマインドの重要性を、堀江純平くんと中村聡太くんが川澄祭を通して得た地域交流の大切さを発表しました。会場の参加者からの意見や応援メッセージをツイッターでリアルタイムにスライドに流してもらい、立ち見が出るほどの会場が一体となって盛り上がりました。

医学部6年生 生駒 弘明



シンポジウムの出番を待つ名市大メンバー



総論討論で発言する東凌平くん(左)と座長の林祐太郎教授

「第116回日本内科学会 医学生・研修医の日本内科学会ことはじめ」で 学生が優秀演題賞を獲得しました！

2019年4月27日にポートメッセなごやで開催されました第116回日本内科学会 医学生・研修医の日本内科学会ことはじめにて「健康診断を契機に発見された肺動脈欠損症の1例」というポスター発表をし、優秀演題賞をいただきました。症例報告とともに国内の成人発症例に関する文献レビュー、鑑別診断や今後の注意点などを考察して発表しました。発表症例の検討、過去の症例報告の検索やまとめ、わかりやすいポスターの作成にとっても苦労しましたが、指導医の金光先生が時間をかけて熱心に指導してくださったため、様々なことを学び、満足のいく発表につながりました。この経験を今後役に立て、いい医師となり活躍できるように努力していきます。



最後になりましたが、今回発表の機会を与えてくださいました呼吸器内科新実教授、熱いご指導をいただきました金光先生、実際に学会会場に応援に来ていただきました先生方や下級生の皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

医学部6年生 三輪 真子



医学部を目指す高校生へ！夏のオープンキャンパス開催

長梅雨が明け夏本番となった8月7日。猛暑のなか医学部を志す高校生やその保護者ら約500人が参加。今年は新たに附属病院大ホールで開催しました。

ここ数年、医学の学部教育は全国的に大きな変革期を迎えています。本学でもより良い変化を求め日々改革に努めています。なかでも、現高校2年生が受験する令和3年は、大学入試制度が大きく変化する年。前半ではその変わりつつある入試に関する情報をはじめ、入学から卒業まで幅広く学び成長できる本学の環境や特徴などを説明。真剣に耳を傾ける参加者の姿がとても印象的でした。

模擬講義は心臓や腎臓の話の名市大が誇る教授陣4人が担当。わかりやすく人体や病気の仕組み、医学の大切さなどを講義。興味を惹いていました。

後半は夏休み中の在学生在が協力。「入試相談コーナー」には、先輩から直接アドバイスをもらえると熱心な受験生が集まり、入試の傾向や対策、地域枠や推薦枠のこと、さらにはどの問題集を使っていたか、苦手克服のコツは、再受験するか悩んでいる、など学生同士だからこそそのQ&Aが飛び出す貴重な機会となっていました。また「BLS(一次救命処置)体験コーナー」では、人体模型やAEDを使ったデモンストレーションと「熱中症ミニ講座」を救命救急サークル「MeLSE」の先輩たちが披露。参加者のモチベーションを上げる、この夏一番のイベントとなりました。

次は秋のオープンキャンパス。11月2日(土)盛大な学祭「川澄祭」ともにお待ちしています。



模擬講義の様子



在在学生による入試相談



BSL体験

市立高校生が研究室を丸ごと体験

大学の研究者には、高大連携や高大接続を通じて「大学の知」を一般に還元することが求められています。名市大医学部では、10年以上前から基礎医学講座を中心とする研究室が、市立高校生を対象とした研究室実験体験の企画を実施し、知の還元に努めてきました。

5年前の平成26年から、本部教務企画室の努力により大学全体へと本企画が広がり、今年では全体で40研究室が協力し、のべ230名を超える学生が『研究室丸ごと体験』に参加しました。医学部からも13研究室がエントリーし、計79名の高校生が研究室にて研究体験を行いました。毎年多くの高校教員も参加しておりますので、将来の高校生にも研究内容が伝えられていくものと期待しております。

本企画が目ざされ、8月14日(水)の朝日新聞や9月5日(木)の読売新聞の朝刊に「高大連携／高大接続」の取り組みとして紹介されました。医学部では、2021年度入試(現高2生が現役受験する時)、名古屋市高大接続推薦入試として最大3名の推薦枠を設けました。本企画に参加した「目が輝く高校生」の中から、モチベーションが高く研究に興味のある高校生が入学する日も遠くないと思います。

文責:副研究科長(入試担当) 脳神経生理学教授 飛田 秀樹



ひとこと☆メッセージ募集!

本誌では、皆様からの一言メッセージを募集します!無沙汰している同級生に、恩師に…ワイワイ楽しいお便りお待ちしております。ほっと和む「名市大人のつぶやきコーナー」をみなさんと作りたいと思います。

例えばこんな一言を、

研究者紹介に載った同期・先輩へ。「おまえも、がんばってるみたいやん。」
 ごぶさたしている同窓生への近況を。「最近、腹が出てきました。」
 新米医師のつぶやき、女性医師必見!ウチの家事両立法!「ここが手抜きポイント!」
 などなど、必要事項を記入の上、葉書かe-mailで下記までお送りください。(注:次回掲載は1月号です)

1.一言メッセージ(30字以内) 2.卒業年度 3.お名前(ふりがな) *匿名希望またはペンネームでの掲載をご希望の場合はその旨をお書きください。*4.住所 5.電話番号またはE-mailアドレス

《受付》〒467-8602 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地 名古屋市立大学 医学・病院管理部
 経営課経営係 広報担当宛 E-Mail:hpkouhou@sec.nagoya-cu.ac.jp

お送りいただいた個人情報については、お便りの採用に関する応募者への問い合わせ、確認以外の目的で使いません

広報誌：瑞医(ずい)

発行：〒467-8602

名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地

TEL (052) 858-7114 FAX (052) 851-4801

URL <http://www.nagoya-cu.ac.jp/>

※次号の発行は2020年1月下旬発行予定です。[年3回 1月・5月・9月]

☐☐
 我こそは
 通信員!

広報誌「瑞医」へ最新的话题をお届けして下さるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、E-Mail:hpkouhou@sec.nagoya-cu.ac.jp
 医学・病院管理部経営課経営係 広報担当まで